

次世代へ橋渡しをしたい

和田 恵子

助産婦・千葉看護専門学校臨床指導員

わたしが7年間勤めた総合病院の産婦人科病棟を辞めたのは「もっといいお産を」と思っていたも、病院という組織に縛られ、医師との方針の違いにぶつかり、ジレンマが募ったからです。自分自身が死産を体験したことも重なり「おめでとう」が言えなくなったのも、理由の1つでした。

その後4年間OL生活を経験、「あー、今日はいいお産だった」といったやりがいと引き換えに、夜眠れることの幸せを知り、医療職の激務さを再確認しました。OL体験での一番の収穫は、人に頭を下げることを知ったということでした。感謝されることが当たり前で、弱い立場の妊産褥婦に対して、高慢ちきであった自分に気づかされました。

いつか子どもができれば、もう少しましな助産婦になろうと思っていましたが、いつまでたっても妊娠しませんでした。子どもがいなかったことが、女性としても助産婦としても一人前ではないと思われるような気がして自信をなくし、暗闇に迷い込みました。

引っ越しを転機として「このままで人生終わってなるものか」という思いが湧き上がってきました。子どもがいなかったことをプラスに考えた場合、本来育児に費やすべきパワーと時間が、わたしには温存されている……。それを使って何かできるかもしれないと思えるようになりました。

今までコンプレックスでしかなかった離職も、医療職以外の人たちからの生の声を聞く充電期間であったと、今では思います。みんなが望むいいお産と

は、理想の助産婦像とは……と考えると、次から次へと思いが膨らんでいきます。

手始めに千葉県内で開業助産婦として活躍されている佐久間助産院をお訪ねし、そこでママさんのためのママさんによるお産が実践されているのを見ました。かわいい小物や季節の草花で飾られた病院臭さのない院内。白衣を着ていないスタッフ。権威の衣を脱いで、ママさんと同じ視線に立って考えようとする姿勢に脱帽しました。

「産むのはママさん自身です。わたしたちは一歩下ってお手伝いするだけ」という院長の佐久間早苗先生の言葉に、「産ませる」という大きな間違いをおかし、思い上がっていた自分が恥ずかしくなりました。また、ママさんと赤ちゃんと助産婦の職業生命という、3つの命を背負う先生の気迫に圧倒され、施設内助産婦としての無責任

さと甘えを痛感しました。

この感動と「いいお産」を助産婦はもちろん、たくさんの人にも一緒に考えてもらおうと思い、朝日新聞の「声」の欄に投稿し掲載されました。反響として助産婦職に対するたくさんの応援のエールを頂きました。わたしのDNAを未来に残せなくても、思いを次世代に伝える橋渡しをしていけたらと考えています。

折しも助産婦界も今、全国各地で勤務場所の垣根を越えたネットワークの芽が吹き出し始めています。この芽を大きく育てて、施設で、地域で助産婦職の可能性を追求していきたいものです。

